第２３回

闘志漲る氷上のファイター

富田　正一

tomita shouichi

Copyright © 2014 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

オリンピアンかく語りき　第23回　富田 正一さん

2020年東京オリンピック・パラリンピックの招致活動を通して感じたのは、招致成功の喜びだけでなく、スポーツ界においては競技力の向上はもちろんのこと、国際スポーツ界への影響力も重要ということではなかっただろうか。
IF（各競技の国際スポーツ連盟）で、現役引退後も国際的な人材として活躍できるアスリートの育成も、今後の日本スポーツ界において急務となっていく。
今回のゲストは、国際アイスホッケー連盟副会長として長年活躍された富田正一さんだ。
「アイスホッケーが私の人生を築いてくれた」と話す富田さんは東京出身。オリンピック出場を含むご自身のアイスホッケー人生、西田善夫アナウンサーとのコンビによる中継の裏話、IFで活動する上で心がけてきたこと、そしてソチ冬季オリンピックに出場するスマイル・ジャパン（日本女子代表アイスホッケーチーム）への期待などを伺った。

聞き手／西田善夫　文／山本尚子　構成・写真／フォート・キシモト

スポーツで胸に日の丸をつけたい

── 富田さんは、東京のご出身ですよね。

はい、東京都中央区の京橋で、本当の江戸っ子です。

── その富田さんがなぜ、氷が必須なアイスホッケーにとりつかれたのでしょうか。

戦時中でしたから、疎開のために小学校を5回も変わりました。私はあまり丈夫ではなかったのですが、親父は大阪の軍事工場で働いており、親父抜きの疎開だったので、4人兄弟（今は5人）の長男として、小学校2〜3年から、まき取り、米の配給をもらいに行くなど、親父の代わりをしなければなりませんでした。その中でつらい目に遭うことも多く、東京に戻ってから、「このままではいじめられっ放しの人生になってしまう。何かスポーツをして、胸に日の丸をつけて、周囲を見返したい」と思うようになりました。
そこで明治中学時代、放課後、講道館に通い始めました。

── え、柔道ですか？

そうです。そのうち柔道着が小さくなって買い換えなければいけなくなったのですが、お金を他のことに使ってしまったので、柔道はその時点で終わりました。

ご家族

次に学校のテニス部に入りました。そのころ、後楽園で、オール明治とメトロポリタンというニューヨークのチームとのアイスホッケーの試合があって、観戦したのです。そのときに、「こんな素晴らしいスポーツがあったのか」と感激しました。

── つまり、テニスを辞めてアイスホッケーを始められた？

はい、中学生でも、希望すれば明治高校のアイスホッケー部の練習に参加できたのです。正式に部に入ったのは、高校生になってからです。先生からは、止められました。リンクの関係で、練習が夜中や早朝になるので、不良化につながると見られていたんです。私は授業中、半分は寝ていましたが、意地になって続けました。

Copyright © 2014 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

オリンピアンかく語りき　第23回　富田 正一さん

富田正一氏

他に希望者がいなかったのでゴールキーパーに

── なぜ、ゴールキーパー（GK）になったのですか。

選手は9人ほどいましたが、希望者がいなかったんです。最初の1年はディフェンスもしていましたが、GKなら試合に出られそうだということで、お年玉で初めてGK用のスティックを買いました。

── 明治高校から明治大学に進まれて、練習環境は良かったのでしょうか。

後楽園にリンクがありましたし、芝の日活スポーツセンターともう一つ、新宿の地球会館というところにスケート場があったので、各大学で使っていました。冬はほぼ毎日、たっぷりとは言えませんが氷に乗れました。それ以外のシーズンですと、氷上練習は週に一度程度でした。
冬の合宿時は、群馬県の赤城山で、強風が吹きつける外のリンクで練習しました。

── 赤城おろしが強く吹くところですから大変ですね。

自分たちでフェンスを張り、氷が痛むと、夜お湯をわかして直してから帰る。当時は電気もないし、バスも上まで行っていません。バスの終点から6キロほどは、米やみそ、練習用のフェンスなど全部持って上がるという時代でした。

強豪県の選手に勝つための練習の工夫

── 明治大学のアイスホッケー部はハイレベルだったのでしょう。

苫小牧、釧路、青森、八戸、日光といったアイスホッケーの強い地域から選手が集まってきましたからね。スケーティングのスピードが全然違いました。私は高校時代から、お願いして大学の練習に入れてもらっていたのですが、飛び出してくるパックを拾って中へ放り込むくらいで、あとは「危ないから上がってろ」。みんなが練習を終えてから、ようやく防具を着けて薄暗くなったリンクで練習させてもらうのが常でした。

── あのころは、早稲田、慶應、明治のほか、法政が力をつけ、立教も強かった。大学へ行って「やれるぞ」と自信を持てたのはいつごろでしょうか。

最初は同級生の中でも一番下で、メンバーにも入れませんでした。でも同期に、村野正夫、尾形庄平といった仲のいい選手たちがいて、「辞めるなよ、一緒にやろう」と引っ張ってくれたんです。上級生には江守敏彦さんというとても上手な方がいて可愛がってもらえましたし。私は負けず嫌いで、追いつこう、追いつこうという気持ちが強かったので、氷上の練習だけでは今の自分はいなかったと思います。

── 大学の練習以外に、何か練習をしていたのですか。

他クラブの練習に道具を背負って行き、氷に乗る時間を増やすようにしました。
夏には、河口湖に家があったので、湖畔から三ツ峠の入口まで、毎日、往復走りました。湖畔を週に一度は一周する。通学時、同じ色の洋服の人をずっと見ていくと、パックを所持している選手と、受けるポジションの選手を頭と目で同時に判断するトレーニングになります。自分なりにそういう工夫をしていました。GKが素早く起き上がる動きは柔道の受け身が役立ちましたし、フットワークはテニスの経験も活きました。

── レギュラーになったのは何年のときですか。

Copyright © 2014 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

3年生の明立戦のとき、GKのレギュラーメンバー2人のうち1人が遅れてきて、「おまえ、道具を着けろ」と初めて言われました。試合には出られませんでしたが、ユニホームを着て練習ができたという喜びでいっぱいでした。3年の終わりごろから、先輩が抜けて試合に出られるようになりました。

アイスホッケーと家業

── 私は富田さんと同学年ですから、富田さんがゴール前で低く構える姿勢が印象に残っていますよ。

当時はきちんとした防具がなくてね、先輩の練習の後に借りるのですが、てれっと伸びてしまって、おまけに臭くてどうしようもない。柔道着をベースにして自分でつくったり、祖母が浴衣の生地や雑巾を刺し子で縫ってくれて、肘当てにしたりしていました。

── おうちの方が協力してくれるという点では恵まれていましたね。

はい、合宿中に腕にパックが当たってひびが入ったことがあるんです。許可を得て帰宅したら、母に「何かのお手伝いはできるはずだから、明日の朝帰りなさい」と言われて、翌日、朝食をとっただけで合宿へ戻る羽目になりました。いま思えば、私を強くするためのおふくろの愛情だったんですね。

── 富田さんは、日本伝来のふすま紙などを取り扱うお店の3代目ですよね。

はい、ふすまや表装など表具師さん、経師屋さんに資材を買っていただく問屋を祖父が始めました。

── その仕事を継がれて、奥さまとともに発展させていらっしゃいます。長男である富田さんは、アイスホッケーと家業のバランスはどう考えていらしたのですか。

最初は家へ帰るのが嫌でした。アイスホッケーをしていれば上手いプレーをすればほめてもらえます。でもあの当時は「富田商店」（現在は株式会社トミタ・東京都品川区）で、帰宅すると小僧扱いです。御用聞き、配達、荷物かつぎなどからのスタートでした。お客様は「おまえのところは遅い」「請求がうるさい」「高くてダメだ」などと文句を言うのですよ。

── 商人（あきんど）の宿命ですな。

士農工商が残っているのか、職人さんを相手にしても常に見下ろされるような数年間がありました。それでもスポーツでゼロからやってきたという自信と自負がありましたから、自分の商品をつくってそれに惚れてもらえれば認められていいビジネスができるだろうと考えました。10年間は勉強期間として世界中を回り、壁紙やインテリアのファブリックについて、フランス、イタリア、アメリカ・ニューヨークなどで学びました。

家業でイタリア出張

明治大学卒業後は実業団の岩倉組へ

── 大学卒業後は、実業団の岩倉組に入りましたね。

私はありがたいことに、アイスホッケーでも仕事でも、どこへ行っても素晴らしい人たちとの出会いがあるのです。出会った人たちとどういう付き合いができるかによって、より豊かな人生がつくれると思っています。とくに感謝しているのは、河渕務さんです。

── 当時の岩倉組の監督さんですね。

Copyright © 2014 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

オリンピアンかく語りき　第23回　富田 正一さん

岩倉組

はい、就職はとにかく実業団にしようと、卒業の前年に岩倉組に行ってみましたが、東京のGKはいらないと言われました。
古河電工は、生涯、勤務してくれるならいいけれどもということで、おふくろから3～4年で家業へ戻れと言われていたので駄目。いったんあきらめて、紙問屋の修業をしようと決めたとき、全日本選手権でのプレーが認められて、岩倉組から「やらせてやるから、布団だけ持ってこい」と連絡があって、青函連絡船に乗って苫小牧に行きました。

── 私はね、アイスホッケーの実況をしたくてNHKを希望したのです。

そうでしたか。

── その時代に僕は北海道の室蘭に赴任していたのですが、王子製紙・岩倉組の決戦はいつも盛り上がっていましたよね。ローカル放送で初の実況をしたことがあります。人口4万人程度の町で3000人ほどの観客が集まった。ねんねこ半纏を着て赤ん坊を背負った若いお母さんが一番乗りだったなあ。黄色い声と怒声に近い応援が混じって、みんなが楽しむ姿に身震いしましたね。
実業団に入って、GKのイメージが何か変わったというようなことはありましたか。

ありましたね。GKは守る人というイメージでしたが、攻撃の起点なのだという意識を強くしました。

── 奥が深くて大事なポジションですよね。

競争を勝ち抜き1960年スコーバレー冬季オリンピックに出場

── 富田さんは東京出身のGKというハンディを克服して、1960年のスコーバレー冬季オリンピック（米国）の代表に選ばれました。そのときはどんな気持ちでしたか。

もう信じられませんでした。候補は4人いました。古川電工の本間、山田、岩倉組の名キーパーの砂盛と私です。
箱根の駒ヶ岳で合宿がありましたが、「スケーティング練習をしていろ」と命じられても、監督がいなくなるとサボる選手はいるわけです。隠れてタバコを吸うやつもいる。私はうまくなりたい一心で真面目にやっていたら、どこかで見ていたらしいんですね。次の合宿の招集通知はハガキで来るのですが、一人減って3人になっていました。最終的に本間と私がメンバーになりました。

── スコーバレーの雰囲気はどうでしたか。

スコーバレーオリンピック出発

もう別世界でした。横浜から氷川丸に乗り、2週間かけてバンクーバー（カナダ）に到着した途端に、いろいろ綺麗な色の家があって、自動車は大きくて、もうおとぎの国に来たような感じでした。バンクーバーから鉄道とバスでオンタリオ州に行き、約1カ月、本番に向けて練習試合を重ねながらトレーニングを積みました。
日本代表選手団の主将は、猪谷千春さん。アイスホッケーは8チームが出場し、日本はカナダとスウェーデンと同じグループでした。一方的な試合になるのがわかっていたので、やる前からこわかったですね。フィンランドとは引き分けました。順位決定戦でオーストラリアと対戦し、勝利して7位。ビリにならずに済みました。

Copyright © 2014 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

オリンピアンかく語りき　第23回　富田 正一さん

伝説の選手 スベン・ヨハンソン

── 1962年の世界選手権（米国デンバー市）で、日本代表はBグループで全勝優勝しましたよね。

富田正一氏

あのときは、東ドイツにビザが下りず、ソビエト、チェコ等の共産圏諸国が反発して出場しなかったんです。それでBグループは日本が優勝し、Aグループはスベン・ヨハンソンのいたスウェーデン代表が優勝しました。私は人との出会いといい、巡り合わせがよくて運が強いようです。

── ヨハンソンは、富田さんの憧れの選手だったのでしょう。彼のポジションは？

スケーティングとスティックワークに秀でたフォワードでした。1953年に来日したのですが、そのときはユールゴルデンというサッカーチームの一員としてでした。

── サッカー？

ユールゴルデンにはアイスホッケーの選手が他にもいて、アイスホッケーの日本代表に請われて急きょ試合をし、彼らが勝利したのです。

── サッカーチームに負けてしまった……。

そうなんです。世界選手権のときに、私たちは彼のヘルメットが欲しくてね。すると彼は我々が獲得したフェアプレー賞のローレックスの時計と「交換しよう」なんて冗談を言いました。最終的にはヘルメットをくれて、苫小牧に持ち帰りました。彼はアイスホッケー選手として活躍したのち、プロゴルファーになりました。

── 多才だなあ。

恵まれない若者へのチャリティー・ゴルフ大会を何度も開催しました。それは素晴らしいスポーツマンで、もう亡くなりましたが、葬儀では私の弔電が読まれたそうです。

西田アナウンサーとのコンビで解説を務める

── 富田さんには、1972年の札幌冬季オリンピックから、5大会ほどテレビ解説をしていただきましたよね。アイスホッケーの元選手の方はなぜか皆話し上手で、富田さんの解説も非常に印象に残りました。

今だから申し上げますけれども、私ははじめ嫌でたまらなかったんです。それまでは組織委員会のほうでお手伝いをしていて、解説のお話をいただいたとき、人前でしゃべることをとても重荷に感じ、どうお断りするか考えたほどでした。でも嫌なことから逃げ続けると、最終的に人生は開けないぞと思い直しました。

── へえー。やってみていかがでしたか。

意外にも楽しくて、終わりごろには「またやりたいな」と感じられました。あの経験が、新たなスタートのきっかけになったのだと思っています。

── 富田さんは、言葉の運びや選び方が実に明快なんですね。あのころは「ここはこうすべきだ」という主張が解説の主流だったのですが、富田さんは「このプレーの意図はこうだったのだろう」という推測や、守備側からの視点のコメントがとても新鮮でした。

私は西田さんからいろいろ教わりました。「十」話す必要があるとすると西田さんは「五十」ぐらいネタを仕込んでいらした。アイスホッケーはワンサイドゲームになる場合がありますが、どんな話をすれば視聴者をつなぎ止められるのか、全部調べておられました。国際アイスホッケー連盟理事のIDカードはオリンピックや世界選手権ではどこでも入れるので、私も西田さんに負けないよう、各監督、選手、チームのことを調べ歩きました。

Copyright © 2014 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

オリンピアンかく語りき　第23回　富田 正一さん

思い出の最高の試合はレークプラシッドでの米ソ決戦

── それは恐縮です。富田さんが思い出す最高の試合はどれですか。

西田さんと一緒だと思いますよ。1980年のレークプラシッド・オリンピック、2月22日の決勝ラウンド、アメリカ対ソビエト連邦（現ロシア）の試合です。当時、ステート･アマでチームを固めていたソビエトは最強とされ、史上初のオリンピック5連覇は確実と言われていましたね。対するアメリカは、大学生中心のアマチュア・チームでした。

レークプラシッドオリンピック　決勝　USA 対ソ連

── ソビエトがアフガニスタンに侵攻し、その年の夏に開催されるモスクワオリンピックでアメリカのボイコットが囁かれる、そんな空気の中での試合でしたよね。
あの大会、僕は開会式を放送していましてね、「世界が一つになってスポーツができる“オリンピック”という機会を失いたくない」という趣旨の発言をしたら、「おまえ、それは言い過ぎだ」と注意されました。

試合は、常にソビエトが先手を取ってアメリカが追いつくというすごい展開でしたよね。最後は4対3でアメリカが勝ちました。
私たちの放送席の前にいたアナウンサーは興奮して、いすを飛ばして転びながら、なおマイクを離さずそのまま実況していましたよ。プロというのはこういうものかと。

── 僕は自分も実況しなければいけないので、その上を向いたままアナウンスを続けたシーンは見ていないのですが、富田さんの肩を叩いて「この際、私たちも立ち上がって放送します」と言ったのですよね。

みんな立ってしまって、我々も立たなきゃ見えませんでしたからね。

── ねえ、あの試合ほど興奮したことはなかったですね。あのとき、ソビエトはモスクワ大会のアメリカのボイコットを避けるために手を抜いたなんていう報道があったのですよ。あとでその試合のゴールジャッジを務めた福田典夫さんに聞いたら、「負けようと思っているチームの選手が、ゴールポストのバーに3本も4本もカーンとぶつけるわけがないでしょう」と笑っていました。

国際会議で意思を直接伝えるため英語をマスター

── 富田さんは国際アイスホッケー連盟（IIHF）で、34年の長きにわたり理事と副会長を務められました。最初は英語が堪能なところを買われたのでしょうか。

たまたま岩倉組で貿易部にいただけで、「英語がわかる」ということになってしまって。当時はオリンピックに出場できるかもしれないと思って、教会の牧師さんの英語教室に通っていました。5割しか理解できていないのに、周囲からはすごくできると見なされてしまう。それが最初はつらくて、よく34年間もIIHFの役員を続けられたと思います。

── 英語の重要性を感じて努力はされていたのですね。

日本アイスホッケー連盟を代表して国際会議に出席して、議事録ひとつとれないのでは、ルールやレフェリングの面で大変なことになりますからね。通訳を使うとどうしても自分の思いが相手に伝わりにくい場面がある。そこで英国人のご婦人を週に一度自宅に招いて、7～8年、勉強しました。

Copyright © 2014 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

オリンピアンかく語りき　第23回　富田 正一さん

長野オリンピック　アイスホッケー優勝チェコ

長野オリンピックで招致公約を守るための調整役に

── 1998年の長野冬季オリンピックでの招致活動で、何か思い出はありますか。

招致団の一員でしたので、決まったときはうれしかったですね。あのときは、どうしてもNHL（北米プロアイスホッケーリーグ）のプロ選手をオリンピックに出場させたかったので、私は国際アイスホッケー連盟のルネ・ファゼル会長（スイス）と共に調整役になりました。

── アイスホッケー会場はビッグハットでしたね。

はい、収容人数は1万席といって招致したのに、招致決定後、5000人規模に減らされそうになりました。「富田さん、NHL選手で本当に1万人集客できるんですか」と聞かれるので、私は心配でしたが「本当です」と言い続けました。議論を重ねて、最終的に2階席を全部取り払い、傾斜を急にして仮設の椅子を設置し、なんとか1万50席にしました。
「チケット代金を2万円もとるのに、プラスチックの椅子に座らせるわけにはいかない。クッションぐらい置いてくれ」と頼んだら予算がないと言う。仕方なく知り合いの縫製工場にお願いしようとしたら、長野の婦人会の方が協力してくださいました。

── チケットは確か売り切れましたよね。

ええ、連日1万人以上入って。長野オリンピックの収益の6割以上は、アイスホッケーによるものだったと思いますよ。

あのとき、自然環境破壊の問題で滑降コースのスタート地点をめぐって二転三転しましたでしょう。当時のホドラー国際スキー連盟会長は、「日本サイドの誰を信じたらいいかわからない」とおっしゃるぐらい混乱していました。私は小林実事務総長と出向き、「今回の決定は絶対に変えない」と約束をし、もしその約束が反故になった場合は「滑降だけ他の国でやる」とまで言われたのです。

── そんなことがあったのですか。

IF（各競技の国際スポーツ連盟）の役員をしていると、みんな友人になり、信頼関係が構築されているのです。

“パートナーシップ・フォー・プログレス”

── 1978年に国際アイスホッケー連盟（IIHF）の理事になられ、94年には副会長に就任されました。日本アイスホッケー連盟においては73年に理事になられ、2003年に会長になられました。双方の活動の兼ね合いや難しさは何かありますか。

IIHFのメンバーとして、我々は各国にいろいろ指導をしに行きます。経済的支援を要望する国が多いのですが、私はそれだけでは絶対ダメだと考えています。軸になる指導者のレベルアップ・教育等、その国のアイスホッケーの発展に影響力を持つ人材の育成に資金援助をします。ですから、こちらからボールを投げっ放しの“ワン・ウエイ”ではなく、受けたら投げ返してほしい。それこそが“パートナーシップ・フォー・プログレス”、IIHFと各国が共に歩むことだととらえています。

Copyright © 2014 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

── なるほど。

しかし残念なことがありました。IIHFのアジア･オフィスを日本につくりました。その際に、要望内容によって予算を出しますということで、IIHFはアジアの活動費として年間5000万円の予算をつけてくれたのです。しかし日本は、一度、レフェリーセミナーをやったっきり、次の要望をしなかった。「どうしようか」とIIHFから相談されましたが、私は「リクエストが来ないならそのままでいい」と言いました。進歩したければ積極的にアプローチしてくるはずで、受け身の連盟にはその意思がないと見なすしかありません。片や、マレーシア、香港、韓国、中国などは有効に活用していましたね。

── ああ、もったいないな。

アジアコーチインストラクターセミナー（釧路）

“フェアプレー&リスペクト”というスローガン

日本と韓国の試合で殴り合いになり、試合の終わりに握手をしなかったことがありました。私はそれを見て、「お互いに相手がいなければ試合はできない。感謝と敬意を持つべきだ」と感じ、“フェアプレー&リスペクト”というスローガンをつくりました。
アジアではたまにあるのです。北朝鮮とカナダの試合で、北朝鮮の選手がフェンスによじ登り、後ろからスティックで殴りつけた。カナダはその試合であと5点入れないと得失点差で敗退する瀬戸際だったので、やり返しませんでしたけどね。この“フェアプレー&リスペクト”のスローガンは今やアジアだけでなく、世界に広がっています。

── アジアの一員という視点もお持ちなのですね。

私は“アジアのお父さん”と、ときどき言われます。アジアでアイスホッケーをやっている国はほとんどなかった状態から、今では13カ国に増えました。

アジアリーグを発案し根づかせる

── アジアといえば、日本アイスホッケーリーグがアイスホッケーアジアリーグに形を変えてもう何年になりますか。

2003年からですから、11年目です。国際アイスホッケー連盟（IIHF）のレギュレーションに、各国代表は1年に何試合以上やり、国内リーグはチーム数が何チーム以上でなければ、世界選手権に出場できないという規約があるのです。それはロシアやカナダの選手をかき集めて、そのときだけその国の代表として世界選手権に出場させる国が現れ始めたための対策でした。

── 帰化ですか。

帰化までもいかず、そのとき限りというケースもありました。しかしこの規定だと、日本も中国も韓国も、国内での試合数、チーム数が足りないのです。その条件をともに満たすために思いついたのが、アジアリーグでした。IIHFの理事会で強力にそれを提案し、支持を取り付け、中国・韓国を説き伏せました。他の人が交渉すると難しいことでも、お陰さまで私の話はどの国もフォローしてくれました。

── アジアリーグは富田さんにとって“我が子”のようなものなのですね。

私は日本というより、“アジアの富田”として認知されています。
定年で国際アイスホッケー連盟（IIHF）の副会長を退くとき、どうしても日本から後任を出したいと思いました。国際的な感覚を持ち、英語が堪能で、経済的にもある程度余裕があり、時間も取れるという男がいたのですが、残念ながら2年前に亡くなってしまいました。代わりに外務省から推薦されたのは元大使で、アイスホッケーのことは全く知らない人。そこでアジアとの関係を重視していた私は、図らずも香港の人を推薦しました。

Copyright © 2014 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

── その方が、日本も含めてアジアという視点でずっと考えてくれるといいですね。

やはりこれも“パートナーシップ・フォー・プログレス”ですよ。現在はオーストリア人のインストラクターをマネジャーとして置いてあります。だから日本アイスホッケー連盟は、今のアジアリーグをもっと発展させるために、アドミニストレーションやメディア対応などでIIHFをもっと活用すればいいのです。「手伝うことはないか」と何度もアクションを促しているのですが、リアクションがなくて。今のところ少し距離を置いている状態です。

東京オリンピック・パラリンピックの招致活動では人脈を駆使

── 2020年東京オリンピック・パラリンピックが決まったIOC（国際オリンピック委員会）総会で、富田さんもブエノスアイレスにいらっしゃっていましたよね。

はい。はじめは招致委員会の国際特別戦略委員会のメンバーとして活動していました。そしてギリギリになって、招致委員会から「行ってください」と依頼されました。もう現役の役員ではないのに、IOC委員から「トミタ」の名前が多く出ていたのだそうです。
とくに、国際アイスホッケー連盟（IIHF）のファゼル会長は、「いつでも必要な時には何でも聞きにいらっしゃい」と声をかけてくれました。

── 冬季競技の関係者も、やはり動いていらしたのですね。

もちろんです。2012年のロンドンオリンピックの際に彼と話をしたいと思い、3日間だけロンドンに行きました。国際的な人間関係が大切だと思ったからです。
よく「富田という男は世界では活発に活動しているようだが、日本のためにはあまり動かない」という声があったようですが、今度ばかりは東京招致のためにこれまでの活動や人間関係を有益に役立てることができました。

── 後者のほうが、国際人としての富田さんの正しい評価ですよね。

ブエノスアイレスで行われたIOC総会、ファゼル会長等と

国際アイスホッケー連盟役員としての精力的な活動の陰に西田さんの叱咤があった

私は西田さんに感謝しているのですよ。

── え、どうしてですか？

私がパネリストで西田さんがコーディネーターを務めていらしたシンポジウムがあったんですよ。「世界で活躍していて、日本での仕事のどんな点で悩みますか」という質問が出たのです。私は「世界で学んだことを全部日本でトライしようと努力してみました。でも西洋かぶれだの、理想主義者だの、お金もマンパワーもないのに、などと否定されて疲れてしまった。だから最近は、聞かれたときには答えるが、自分からポジティブに働きかけるエネルギーはなくなりました」と答えたのです。
すると西田さんが烈火のごとく、「富田さん！　あなたのような世界で活躍できる方は日本を変えるためにいろいろやらなければいけないのに、その言い方は何ですか！」と怒ったんです。

── なんだか失礼なやつですね。

Copyright © 2014 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

いや、終わったあとに、「私はあなたと長く仕事をしてきて、なあなあだと思われるのが嫌で感じたことを言わせてもらいました」と話しかけてこられて、「うちへ寄ってコーヒーでも飲んで行きませんか」と誘ってくださってお邪魔したのを覚えています。

── あの節はありがとうございました。

あの叱咤激励は効きました。
世界で私は、本当にいい環境と幸せをもらっていました。ただそれを日本にどうつなげるかというところで、「来る者は拒まず」の職人肌の私は、自分のほうから「おーい、集まれー!」と呼び掛けをするのが苦手で、時として誤解を生むことはありました。そんなわけで、日本アイスホッケー連盟会長と、国際アイスホッケー連盟の副会長を兼任するにはつらいことがありました。皆さんからは、エネルギーが外に向いているように見えたのでしょうが、それは海外のほうが投げかけに対するリアクションが速いからという側面があったのです。

── 日本は島国であることや国民性、語学力も左右しているのかもしれませんね。

そうですね。日本には山あり、谷あり、川あり、海あり、素晴らしい四季と食べ物がある。もっと国際的に自信を持っていいんです。世界はもっとグローバルな日本人を待っているのですから。

東京にアイスホッケーの世界選手権を開催できる施設を

実は2020年の招致活動のお手伝いをするときに、私は当時の石原慎太郎知事に一つ条件をつけました。いま日本にはアイスホッケーの世界選手権の開催基準を満たす会場がありません。そこで、バレー、バスケット、何でもいいのですが、マルチユースできる体育館に氷の施設を整備し、冬はアイスホッケー会場として使えるようにしてくださいと。それを聞いていただけるなら、私は徹底的に招致活動のお手伝いをさせていただきますと。

── そうだったのですか。

これ、国際アイスホッケー連盟（IIHF）会長で国際オリンピック委員会委員のルネ・ファゼルのアイデアでもあったのです。「ショウ、これはアイスホッケーにとってもいいチャンスだよ」と。そして竹田恆和日本オリンピック委員会会長と一緒に食事をしたときに、彼は「このお約束をしていただけないなら、私は招致活動のお手伝いはしませんよ」と宣言したのです。

── 無事、招致に成功しましたから、東京の学生や子どもたちのためにもぜひスケート場と練習場が整備されるといいですね。

日本アイスホッケー連盟役員

Copyright © 2014 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

優れた施設と指導者にもっと投資をすべき

西田さん、私は長く国際アイスホッケー連盟に携わって、やはり施設と指導者に投資をしなければ駄目だということを痛感しています。次世代の若者のスポーツ環境を整えるのにあたり、施設だけでなく、正しい指導のできる指導者の養成は欠かせません。これはスポーツ先進国ならどこもやっていることです。いい指導者とそれなりの施設の充実については、私は死ぬまで声を大にしていこうという覚悟です。

— スポーツ界の中で人材を育てるという意味では、セカンドキャリアが大事かと思いますが、どうお考えですか。

現在のスポーツコーチは、ある程度の経験と時間とお金のある人がボランティアで指導をするというケースがまだ大勢でしょう。そこをスポーツクラブや学校が経済的な支援をして、コーチとして生活ができるシステムが必要です。つまり、国として施設と指導者を応援してほしいわけです。「馬鹿野郎」と威嚇したり、手を上げるコーチではなく、きちんと生理学や心理学、体育学を修め、各人の心と体に適した指導ができるプロのコーチがたくさんいれば子どもは成長しますよ。

— そこがうまく回るようになれば、スポーツ界でインターナショナルに活躍できる人材の育成にもつながりそうですね。

そうです。そのためには2020年の東京オリンピック・パラリンピックを好機にしなければなりません。2020年という大きな目標に向かって、政治の世界ではスポーツ庁が設立されてしっかりした軸ができるでしょう。公的な軸がしっかりすれば、それに負けないだけのスポーツ界の人材育成が急務になります。政治主導のスポーツ界ではなく、スポーツ界主導で政治協力をしてもらえるようにならないといけないのです。

NHLの強豪「バンクーバー・カナックス」訪問。前列右端がパブル・ブレ

スポーツ・コーチングの先進国の北欧をモデルとして学びたいこと

9歳の孫を、夏休みにフィンランドのビエルマキというところで開催された9～10歳対象のアイスホッケー・キャンプに連れていきました。そこには4年制のコーチ学校があり、2年経つとコーチの実地経験を積ませるのです。

— インターンシップのようなものですね。

そうです。子ども30人のところにコーチ6人が氷に乗ります。すると子どもたちはぼけっとしている時間がなくて、非常に練習効率がいい。一人のコーチの指導が終わると、次のコーチの指導を受けるので、2時間で子どもたちはくたくたになるほど密度の濃い練習ができます。
これが日本だと、30人の子どもにコーチ2名程度。6人が氷上にいるとあとの子どもはなかなか順番が回らず氷の外で待つしかない。

— 効率が悪い。

それでなくても日本はリンクが少ない。ならば、効率のよい練習方法をもっと研究すべきなんです。私は日本のコーチを何度もフィンランドに連れていっていますが、「僕のチームに余計な口出しをされると困る」と言って、なかなか受け入れてもらえません。

Copyright © 2014 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

オリンピアンかく語りき　第23回　富田 正一さん

オリンピックオーダー受賞（ソルトレイクシティ）

── フィンランドやスウェーデンといった北欧は、とても進んでいるのですね。それはウインタースポーツ以外でもですか。

高校生対象のサッカー指導を見せてもらいましたが、アイスホッケー同様、コーチが専門ごとに分かれて効率よく練習していました。練習に出てこないグループがあったので何をしているのか聞いたら、学校の先生が来ていて、遅れている勉強の補習や、就職指導として経理やホテルマネジメントなどのコースを選ぶこともできるということでした。当然、アスリートとしての競争も厳しいんですよ。35人いると、25人にはおそろいのジャケットが与えられるけれども、10人は帰される。

── うまくなれる環境をつくり、どうしてもメンバーに入りたいという競争心を煽りながら、ちゃんとフォローもしているのですね。

国際アイスホッケー連盟の殿堂入り

── 富田さんは、2001年に藍綬褒章を受章されました。2002年には、長野オリンピックの成功が認められ、国際オリンピック委員会から「Olympic Order」銀賞の表彰を受けました。さらに2006年には、アイスホッケー界への長年の貢献が高く評価され、日本から3人目の国際アイスホッケー連盟の殿堂入りを果たされています。

殿堂には、堤義明さん、河渕務さんに続いて私が入りました。そのお二人がいなければ、今の私はいませんでした。

堤義明氏という存在

── 堤義明氏の存在はアイスホッケー界にとって大きいと思いますが、どんな方ですか。

ゴードン・レンウィック氏（IIHF役員）ご夫妻、堤氏と

あの方ほど自分で経済的な支援もし、行動もする人は日本では数少ないでしょう。
堤さんは多くの場面で、経済的なフォローをしてくださいました。話は長くなりますが、ソビエトのナショナルチームを呼んで、トレチャク、マカロフ等のマジックホッケーを日本で見たい。ボビー・ハルがいるウィニペグ・ジェッツのようなレベルの高いカナダのチームも呼んで、東京で試合をやってもらおうというときに、交渉役がいなかった。そこで私がソビエトのアイスホッケー連盟の会長に折を見て話をしようとすると、なかなかつかまらないんです。そうしたらオーストリアの連盟の会長がアドバイスをくれて、「ショウ、サウナを貸し切れ」と。サウナに招待したら、コロスコフという会長でしたが、ウォッカ持参でやって来て、快諾してくれました。

Copyright © 2014 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

── 両方のチームが来日して、元旦と2日、NHKで実況しましたよね。

そうでしたね。双方に支払いをするときに、「日本はジュニア世代が世界選手権に出場していない。そのために寄付するよ」と残していってくれました。
次にソビエトとチェコのチームを呼び、その次はソビエトとスウェーデンをといったときでも、「赤字が出たらホテルでオレがカバーしてやるよ。応援するからやってみろ」と背中を押してくださったのが堤さんでした。

── 世界に人脈のパイプをつくった富田さんと、堤さんのコンビネーションだからこそ、なし得たイベントですね。

本当に長い間、堤さんと日本アイスホッケー連盟の仕事をしました。両方とも、アイスホッケーが好きだったから長続きしたのだと思います。よく怒られたり、また褒められたりしましたが、私は常に番頭役に徹しました。
堤さんのような方は誤解されやすく、功罪を言われることもあります。しかし、“功”の部分でのパワーはものすごかった。2020年の東京オリンピック・パラリンピックについても直接関わりは持ちませんでしたが、「絶対に招致してくれ」と言い通しておられました。

── では決まって喜んでいらっしゃるのですね。

スマイルジャパン

アイスホッケー日本女子代表「スマイルジャパン」への期待

── 2月6日には、ソチ冬季オリンピックが開幕します。日本の女子アイスホッケーチーム「スマイルジャパン」への期待はいかがでしょうか。

日本には長い間、男性中心の社会がありました。ところが昨今は、男女がともに社会をつくる共生社会に変わってきました。サッカーのなでしこジャパンがパワフルに活躍を見せたことも、大きな刺激になりました。でも体協に何度もかけあっているのですが、国民体育大会にはまだ女子種目がないんですよ。シニア男子、ジュニア男子と同様に予算をつけて世界への道筋をつけなければいけなかったのに、境遇的に裕福ではありませんでした。それでも河渕務さんは、女子のアイスホッケーは大事だと訴え続けました。

── 現状、女子アイスホッケーはアメリカ、カナダが強さで突出していますよね。

そのことで、前回のバンクーバー大会の後、国際オリンピック委員会から「女子のアイスホッケー種目を外すべきではないか」という議論が起きたのです。そのとき、ルネ・ファゼロ国際アイスホッケー連盟（IIHF）会長は「ちょっと待て」とストップをかけました。「女子のランキングトップ12の国に特別なプロジェクトをつくる。それにあたって、各国からアンバサダーを出しなさい」ということでした。日本もその中に入っていたので、メル若林（若林仁）を送り込みました。

── カナダから帰化して長く活躍したあの若林仁・修兄弟のお兄さんですね。

Copyright © 2014 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

そうです。他国がカナダやアメリカと接戦できるレベルまで上がらないと、女子ホッケーは終わってしまう。IIHFがどんどん投資をするから強化を進めてくれと。カナダ、アメリカからコーチも送るし、試合もたくさんやる、というプロジェクトでした。
ですから予選でのスマイルジャパンの戦いぶりを見たとき、こんないいチームに育ったのかともう信じられない思いでした。日本は、1対1では体の大きさとリーチで相手にかないません。でも必ず2対1になるような陣形をつくれば、絶対にいい試合をやれる。パスしたらすぐ動くホッケーを目指して、あれだけ速いプレーを身につけたのです。
河渕さんが女子に力を入れていなかったら、今はあり得ません。選手たちは皆、河渕さんの子どもみたいなものですよ。

── 孫じゃないですか。

あ、そうですね。みんなハートが強いのでいいプレーをしてくれるでしょう。

あきらめずに逃げずにチャレンジを続けよう

── 最後に、次世代を担う青少年たちに伝えたい、富田さんならではのスポーツマン･スピリットを教えてください。

人間は弱いものです。スランプもあるし、嫌なこともいっぱいある。しかし「逃げるな。チャレンジしろ」ということです。二つの道に分かれるときに、どうしても楽なほうに逃げやすい。自分が大きく成長したいなら、あえて自ら苦しい道を選ぶことです。
札幌オリンピックのときに、西田さんとご一緒させていただいた解説の仕事を逃げなくてよかった。英語ができると思われて国際会議に派遣され、なかなか議事録がとれず、周囲の人たちにしつこく食い下がりながら、必死に勉強したからこそ今があるわけです。

── 最初は大変でも、まず一歩踏みださないと始まらないということですね。

雪だるまをつくるときに、最初の芯となる部分が柔らかくていびつだと、もろくなってしまう。でも時間をかけて硬く丸くしておけば、大きくて割れにくい雪だるまができるでしょう。それと同じです。GKとしてなかなかメンバー表に載せてもらえないとき、私はあきらめずにチャレンジを続けました。
人は一人で生きるには弱い生き物ですが、いい協力者と出会えると大きく成長できます。ですから人との出会いも大切にしてほしいものです。西田さんとこうして長くお付き合いさせていただいているのも、そういうことだと思います。

── 本当ですね。

私は、アイスホッケーのお陰でいい人生をもらいました。いろいろな方のお世話になってきました。これからは、一つひとつ恩返ししていきたいと思っているところです。

オリンピックオーダー受賞（ソルトレイクシティ）

Copyright © 2014 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

スケートの歴史

1908 明治41
アイスホッケーの国際統括団体として国際アイスホッケー連盟（IIHF）創設

1915 大正4
平沼亮三がアイスホッケー防具を日本に輸入

1920 大正9
フィギュアスケート愛好者たちにより日本スケート会が結成

1924 大正13
スピード・フィギュア・アイスホッケーの全体的発展を目指して、全国学生氷上競技連盟が結成

1926 大正15
日本スケート会が国際スケート連盟に加盟

1927 昭和2
学連OBを中心に大日本氷上競技連盟が創立

1928 昭和3
日本スケート会を中心に日本スケート連盟が結成

1929 昭和4
大日本氷上競技連盟と大日本スケート連盟が合流し、大日本スケート競技連盟を創立、全国組織が一本化

1930 昭和5
大日本スケート競技連盟主催の第1回全日本選手権開催

1931 昭和6
大日本スケート競技連盟が大日本体育協会に加盟

1934 昭和9
第7回明治神宮体育大会にスケート競技が加えられ、スピード、フィギュア、アイスホッケーの3競技を実施

1936 昭和11
大日本スケート競技連盟が日本スケート会に代わり、国際スケート連盟のメンバーとして承認

1936 富田正一氏、東京都に生まれる

1945 昭和20
終戦に伴い、大日本体育会の部会が解消され、大日本スケート競技連盟も新組織で再出発

1945 第二次世界大戦が終戦

1946 昭和21
大日本スケート競技連盟の戦後初の全国代表委員会を開催、連盟の構成単位を地域別から都道府県別に改組

1947 昭和22
第1回国民体育大会スケート競技を戦後初の全日本選手権大会を兼ねて八戸市で開催

1947 日本国憲法が施行

1950 朝鮮戦争が勃発

1951 昭和26
スピード・フィギュア共に戦後初めて世界選手権に参加し、内藤晋が500mで優勝

1951 安全保障条約を締結

1954 昭和29
第48回男子世界スピード選手権を札幌で開催。他の競技も含めて、日本で最初の世界選手権大会

1955 日本の高度経済成長の開始

1962 昭和37

1960 富田正一氏、スコーバレー冬季五輪に出場

女子世界スピード選手権で高橋かね子が1500mで3位入賞、戦後女子選手として初めての表彰台。フィギュアで冬季ユニバーシアード大会に初参加し、上野（平松）純子優勝、佐藤信夫が2位

1962 富田正一氏、IIHF世界選手権に出場

1964 東海道新幹線が開業

1966 昭和41
日本アイスホッケーリーグ開幕

1969 昭和44
男子世界スピード選手権で鈴木惠一が500mで3連覇

インツェルの国際競技会で鈴木惠一が39秒2の世界新記録をマーク

1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸

1972 昭和47
第11回五輪冬季競技大会を札幌で開催

1973 オイルショックが始まる

1976 ロッキード事件が表面化

1977 昭和52
世界フィギュア選手権を東京で開催し、佐野稔が日本選手初の3位と健闘

1978 昭和53
日本スケート連盟が社団法人として法人格を取得

1978 富田正一氏、国際アイスホッケー連盟理事に就任

1978 日中平和友好条約を調印

1979 昭和54
世界フィギュア選手権で渡部絵美が日本女子初の3位

1980 昭和55
ショートトラックISU選手権で加藤美善（500m、3000m）、加藤美佳（500m、1000m）が女子種目の完全優勝を分け合い、総合でも1位、2位

1982 東北、上越新幹線が開業

スケートの歴史

1984
昭和59

サラエボ五輪で北澤欣浩が500mで銀メダル、スケート日本人初のメダル獲得

財団法人日本スケート連盟として認可

1984 香港が中国に返還される

1988
昭和63

カルガリー五輪で黒岩彰が500mで銅メダル獲得、橋本聖子は出場した全種目で入賞。ショートトラックは公開競技となり、獅子井英子が3000mで金メダル、男子500mで石原辰義が銀メダル、女子3000mリレーでは銀メダルと、合計3つのメダル獲得

1990
平成2

アジアスケート連盟設立

1992
平成4

アルベールビル五輪で橋本聖子が1500mで念願の銅メダルを獲得、男子500mで黒岩敏幸が銀メダル、井上純一が銅メダル、1000mで宮部行範が銅メダルを獲得。フィギュアでは伊藤みどりが女子シングルで銀メダル、ショートトラックは正式種目となり、男子5000mリレーで銅メダル獲得

1994
平成6

リレハンメル五輪で堀井学が男子500mで銅メダル、女子5000mで山本宏美が銅メダル獲得
世界フィギュア選手権で佐藤有香が女子シングルで優勝

1995 阪神・淡路大震災が発生

1998
平成10

長野五輪を開催。清水宏保が男子500mで金メダル、1000mでも銅メダル獲得。女子500mで岡崎朋美が銅メダル獲得。ショートトラック男子500mでは西谷岳文が爆発的なスタートで金メダル、植松仁も銅メダル獲得

2001
平成13

第56回新世紀・みやぎ国体・冬季大会からショートトラックが正式競技

世界距離別選手権男子500mで清水宏保が世界新記録を出し大会4連覇

2002
平成14

ソルトレークシティー五輪男子500mで清水宏保が銀メダル獲得

2002 富田正一氏、「Olympic Order」銀賞受賞

2003
平成15

アジアリーグ開幕。日本製紙クレインズが初代王者に

2003 富田正一氏、日本アイスホッケー連盟会長に就任

2006
平成18

トリノ五輪フィギュア女子シングルで荒川静香がアジアで初の金メダル獲得

2006 富田正一氏、国際アイスホッケー連盟殿堂入り

2007
平成19

福藤豊が日本人初NHLプレーヤーに

2008 リーマンショックが起こる

2010
平成22

バンクーバー五輪男子シングルで高橋大輔が日本男子初となる銅メダル獲得、女子シングルスでは浅田真央が銀メダル獲得。スピード男子500mで長島圭一郎が銀メダル、加藤条治が銅メダルを獲得、女子チームパシュート（穂積雅子・小平奈緒・田畑真紀）は銀メダル獲得

2011
平成23

東日本大震災により東京での開催が中止となり急遽ロシアでの開催となった世界フィギュア選手権で安藤美姫が2度目の優勝、小塚崇彦が2位

富田 正一（とみた・しょういち）

1936年東京都生まれ。60年スコーバレーオリンピック、62年IIHF世界選手権に出場。引退後は国際アイスホッケー連盟副会長、日本オリンピアンズ協会代議員などを歴任。2002年に国際オリンピック協会より「Olympic Order」銀賞受賞。06年国際アイスホッケー連盟殿堂入り。

西田 善夫（にしだ・よしお）

1936年生まれ。スポーツ評論家、元NHKエグゼクティブアナウンサー、解説委員。64年の東京大会以来オリンピック10大会で実況、5大会で解説・キャスターを務める。98年から02年まで横浜国際総合競技場初代場長。著書に『オリンピックと放送』（丸善）ほか。

山本 尚子（やまもと・なおこ）

東京都生まれ。スポーツライター、NPO法人日本オリンピック・アカデミー理事。スポーツビジネス・シンクタンク勤務を経てフリーとなり、スポーツを中心に執筆活動を行う。『パラリンピックがくれた贈り物』など著書・共著多数。

フォート・キシモト（写真提供）

半世紀にわたり、オリンピック、FIFAワールドカップ、世界陸上などの世界のビッグイベントから市民スポーツに至るまで、幅広くスポーツの写真取材活動を継続して行っている世界的なフォト・エージェント。

企画制作　公益財団法人 笹川スポーツ財団
後　　援　文部科学省、東京都、公益財団法人 日本体育協会、公益財団法人 日本オリンピック委員会、
特定非営利活動法人 日本オリンピアンズ協会、東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会
メディア協力　（株）共同通信社、サンケイスポーツ
特別協力　（株）アシックス、（株）伊藤園、（株）JTB